



◎黒川農学校として1901年に開校。2010年に機械、電子、環境系の学科に再編した。08年から「黒高マイルール宣言」に基づく改革に着手。09年から3年間、宮城県教育委員会から産業人材育成重点化モデル事業の指定を受ける。エネルギー教育実践校に認定されるなど、環境教育にも力を入れる。

設立

1901(明治34)年

形態

全日制／普通科・機械科・電子工学科・環境技術科／共学

生徒数

1学年約240人

11年度入試合格実績(現浪計)

公立大は宮城大に1人合格。私立大は、東北学院大、東北工業大、東北生活文化大、石巻専修大などに延べ17人が合格。短大は4人、専門学校には40人が合格。就職は一般企業227人、公務員3人。

住所

〒981-3685
宮城県黒川郡大和町吉岡字東柴崎62

電話

022-345-2171

Web Site

<http://www.kurokawa.myswan.ne.jp/>

宮城県
黒川高校

学校改革

学び直しの徹底と データによる効果検証で 生徒・教師の意欲が向上

変革のステップ

背景

◎生徒指導上の課題が多く、生徒の進路意識も希薄で、就職実績が低迷。地域からの評価も低かった

STEP 1

実践

◎全校体制による生徒指導の徹底、学び直しの導入、データ活用による教師の意欲向上を図る

STEP 2

成果

◎生徒の荒れの収まりと共に学力が向上し、就職実績も好調に推移。指導改善への教師の意欲も高まる

STEP 3

**進路意識の低さや学力の不足が
就職活動の足を引っ張る**

宮城県黒川高校は、普通科、機械科、電子工学科、環境技術科を擁する専門系高校である。最寄り駅から車で約30分という立地もあり、全体の8割は地元の黒川郡の生徒で占められる。生徒は礼儀正しく、廊下や教室の掃除は行き届き、落ち着いたたたずまいを見せているが、5年程前までは生徒の荒れに悩む学校だった。生徒指導部長の長田晃明先生は、当時をこう振り返る。

「2008年度に赴任した時、生徒たちの様子に驚かされました。集会ではきちんと整列できず、服装は乱れ、髪を染めている生徒が目立ちました。地域からの評判は良くなり、先生方のパワーのほとんどは生徒指導に費やされていて、学力向上や進路意識の育成にまで手が回りませんでした」

学力や進路意識の課題は、就職状況にも影響していた。面接で高い評価を得たにもかかわらず、学科試験の得点が思わしくなく内定を逃す生徒や、待遇面だけを見て会社概要を詳しく調べずに就職を決め、入社後10日で辞めてしまった生徒など、学力の低さ、進路意識の希薄さから就職につまずく例が少なくなかった。進路指導部長の丸山泰史先生はこのように話す。

「生徒が事前に相談していれば、失

敗を避けられた例もあつたと思います。それでも担任に相談しなかつたのは、生徒が学校を信頼していない証拠といえるでしょう。学校や教師への信頼感を育み、入学時から進路情報をしっかり伝え、生徒の進路意識を高める必要があると感じました」



倉光恭三 くらみつ・きょうぞう
宮城県黒川高校校長
教職歴7年。同校に赴任して4年目。「学校は生徒の可能性を開花させるために必要な意識・態度・知識・専門性を育む場である」



伊藤俊 いとう・しゅん
宮城県黒川高校教頭
教職歴28年。同校に赴任して2年目。「日本を担う人材を育てたい」



長田晃明 おさだ・てるあき
宮城県黒川高校
教職歴23年。同校に赴任して4年目。生徒指導部長。「さまざまな取り組みにより、生徒の『心』を育てていきたい」



岩手正浩 いわて・まさひろ
宮城県黒川高校
教職歴17年。同校に赴任して6年目。教務部長。「学ぶ楽しさ、知る楽しさを生徒に伝えていきたい」



丸山泰史 まるやま・たいし
宮城県黒川高校
教職歴16年。同校に赴任して9年目。進路指導部長。「正確な状況把握をし、そこですべきことは絶対にしていきたい」

「黒高マイスクール宣言」で学校のビジョンを明確化

08年度に民間企業出身の倉光恭三校長が赴任したことが、同校の転機となった。折しも、県の企業誘致により、自動車メーカーの系列会社などが近隣地域に進出し始めた頃だった。同校は従来の農業・土木系の学科を機械・電子・環境系に改編し、「ものづくり人材」の育成拠点として地域の人材ニーズに応える体制を整えた。

更に、生活態度と規範意識の改善を重点目標に据え、黒川高校の伝統と地域の要請との協調を大切にする姿勢を明確にし、それを「黒高マイスクール宣言」として発信した。倉光校長は、その狙いを次のように説明する。

「組織にとって大切なことは、共有ビジョン、貢献意欲、そして協調（コミュニケーション）の『3K』だと思います。先生方は貢献意欲が高く、協調して物事に取り組みむ力を持っていました。そこで、必要なのはビジョンの共有であると感じ、『黒高マイスクール宣言』として目指すべき学校像を明確にし、目標に向かって先生方の力を結集させていったのです」

「黒高マイスクール宣言」を実現するために、何よりも優先して取り組まなければならなかったのが生徒指導の強化だった。

「それまでの生徒指導は、担任や生徒指導

部だけが言い、学校全体の取り組みには至っていませんでした。今後は、教師が丸となって組織的に指導に当たること、当たり前のことであっても一つひとつの指導を徹底して行うことを確認しました。また、単に厳しく指導するだけでは、生徒の自発性を引き出し、学校への帰属意識を育んだりすることは出来ません。そのため、学校の荒れにより中止していた文化祭の再開や、生徒会活動の充実に力を注ぎました。問題行動に向かいがちだった生徒のパワーを学校活動へ向けられるよう、教師全員でサポートしていったのです」（長田先生）

また、生徒が地域の祭りに参加したり、小学校を訪ねたりする機会を利用して、子どもたちにもものづくりを教える機会を設けるなど、地域との関係づくりにも力を入れた。

徹底した生徒指導、課外活動の活性化によって、遅刻・欠席者数、転学・退学者数、特別指導の件数は激減していった。生活態度も落ち着き、授業や集会などで教師の話聞く態度も格段に良くなっていた。

学校設定科目「パワーアップ」で学習に向かう姿勢を涵養

進路意識の向上や、学びの意欲を喚起するための教科指導の改革も進めた。

*プロフィールは2012年3月時点のものです

進路にかかわる情報は、週1回、進路指導部が発行する進路通信「未来へ」で伝えた。働く意味、正社員とフリーターの違い、先輩の成功例・失敗例、仕事と学歴・学力の関係など、進路を考えるために必要な情報を時期に応じて提供し、進路意識の涵養に努めた(11年度以降は前年度のプリントを1・2年生用、3年生用の2冊にまとめて配布)。

基礎学力の定着に向けて、1年次に学校設定科目として「パワーアップ」を設けた。国語・数学でそれぞれ週1コマ、小・中学校段階の学習内容に取り組みというものだ。

授業はプリント学習を中心に進める。プリントは3枚構成で、1・2枚目は習得しておくべき必須の内容、3枚目は早く終わった生徒のための応用問題とした。国語は1枚目が漢字の書き取りで、最初の10分間で解答して自己採点を行い、間違えた問題の書き取りを10回行う。数学は、最初の10分で1枚目の四則演算に取り組み、間違えた問題は正解するまで解き直してから2枚目に取り組み。3枚目の応用問題は、国語では語源や対義語・類義語などを辞書を使って解く調べ学習をし、数学では1・2枚目より難しい文章問題を中心に学習する。

基礎学力の定着もさることながら、「パワーアップ」の一番の狙いは、生徒に学習態度をしっかり身に付けさせることにあると、丸山先生は強調する。

「生徒がきちんと席につき、落ち着いて授業を受ける環境づくりが喫緊の課題でした。社会で最低限必要となる国語力や計算能力を身に付けることも重要ですが、本校の生徒にとって最も必要なのは出来る喜びを味わわせることです。成功体験を積み重ね、やれば出来るという意識を育て、前向きに授業に取り組む意欲を引き出すことに主眼を置きました」

「パワーアップ」の授業を始める際には、制服をきちんと着てシャツの襟を正すよう指導する。忘れ物をした場合は、反省文を提出するまで次の課題に進ませない。教科指導と生徒指導を一体的に行い、学習するのにふさわしい態度を身に付けさせるのだ。

12年度からは、生徒の生活態度が落ち着き、学力が上がってきた現状を踏まえ、授業時数を国数合わせて週1コマに縮小し、就職試験を見据えた対策問題の演習も盛り込む予定だ。

客観的なデータから効果を検証し 自ら行動する教師集団となる

これらの取り組みの効果検証は、各分掌で日々蓄積しているデータを基に行っている。生徒指導面では遅刻・欠席者数、退学・転学者数、特別指導の件数の推移などで把握し、教科指導面では定期考査の成績、ベネッセの「基礎力診断テスト」(*)、Fineシステムでの検証、

英検や漢検の受検者数で、地域からの評価では学校の入試倍率やオープンスクールへの参加者数などと、あらゆるデータを駆使して学校の状況を多面的に把握している。

教科指導の改善で活用しているのは、生徒からの授業評価と「基礎力診断テスト」のデータだ。以前は、入学後の学力の推移は右肩下がりだったが、今は、入学時の学力が同程度の学校と比較して生徒を伸ばすことが出来ている。教務部長の岩手正浩先生は、こうしたデータによって、教師は自身の指導改善の成果を実感できるようになったと述べる。

「教師は、少なからず自分の授業に対して不安を持っています。特に教科指導が成立しにくい状況にあった本校では、目の前にいる生徒の学力をどう伸ばしていけばよいか、手探りの状態でした。授業評価で指導を改善し、基礎力診断テストで客観的な把握をし、その成果を実感することが出来ました」

また、10年度の学校評価アンケートでは、授業に対する生徒の満足度が低かったにもかかわらず、教師は「授業を工夫している」と回答する率が高かった。そのギャップを埋めることが課題の1つになっていたが、11年度は生徒の満足度が上がり、一方で、教師は「もっと改善が必要」と回答する割合が増えたという。

「教師の発問にしっかりと答えられる生徒が増えるなど、生徒が変化し、授業での学びが

*ベネッセの「進路マップ」の教材の1つで、幅広い学力層に対応する出題内容となっている。学力を測るだけでなく、テスト実施を契機に進路を考えさせたり、学習習慣の定着状況について把握したりすることも可能

楽しいと思えるようになってきたのだと思います。そして、そうした生徒の姿が教師を刺激し、分かりやすい授業、生徒の実状に合った授業を追求していかうとする意欲を高めているのだと思います」(石手先生)

教務部が呼び掛ける前に、学年団が率先して週末課題の導入を提案したのも大きな変化だった。今、生徒に何が必要かを考え、それに向かって自ら行動する教師集団に生まれ変わりがつつあるのだ。

教師の意欲を高めることが生徒の満足度を向上させる

データを通して教師が改革の成果を実感し、達成感を得ていることは、改革の推進力になっている。伊藤俊教頭は次のように述べる。

「学校として成果を上げようとする時、生徒や保護者の満足度に目が向いてしまい、教師の満足度はなおざりになりがちです。しかし、管理職として考えなければならないのは、先生方の満足度も高めることです。自分たちの努力が確実に生徒の成長につながっていることを、データを通して実感してもらおうことが、教師の指導改善への意欲を高め、ひいては生徒の学力や進路実績の向上をもたらすのです」

伊藤教頭は教師や保護者、地域の人々にヒア

リングをし、課外活動における生徒の様子や授業態度、テスト・検定などへの取り組み方など、生徒の変化を抽出し一覧にしている(図)。定量データには表れにくい生徒の定性的な変化を教師や地域の方々などの声から捉え、立体的に生徒の現状を把握することで、指導の進捗を確認し、教師の達成感を高めるのである。

改革から4年が経ち、荒れた学校の雰囲気は

図 伊藤教頭がまとめた生徒の変化(抜粋)

現象	場面など	変容の視点Ⅰ(教師)	変容の視点Ⅱ(地域・保護者)
集団行動	集会	3、4年前までは全校集会時の整列に時間が掛かっていた。集会中も列が乱れがちで私語も多く、指導を必要とする態度の生徒が見られた。昨年、一昨年頃から改善が見られ、今年度は私語をする者も見られず、整然とした態度で臨んでいる。	(同窓会長)講演会の聴講態度は以前に比べ格段に良くなっている。下を向いている生徒が少なくなっている。もちろん私語はない。
	修学旅行	空港などでの集合時、引率教師や添乗員の話聞く際に、私語や下を向く生徒がほとんど見られず、校外活動でも規律の取れた集団行動が出来るようになった。	(添乗員)見学地や空港での集合も時間が掛からず整然と整列している。指示事項も静かに聞いてもらえる。立派である。
学習姿勢	授業	授業中に校舎内をウロウロする生徒が全くいなくなった。	
	考査	定期考査前に教室で居残りをして試験勉強をする生徒が見られるようになった。2、3年前は見られなかった。	

*学校資料を基に編集部で作成

なくなつた。生徒の生活態度は見違えるようになり、高校入試の志願倍率、入学者の学力も確実に伸びている。卒業時の実績も好調で、11年度卒業生の就職内定率は95%だった。安心して学べる学校への変貌を背景に、現在は、同校は更なるステップアップを遂げようとしている。「黒高マイスクール宣言」の方針はそのままに、今後は社会に認められる「黒高ブランド」の構築を目指していくという。

国公立大の合格者を増やし、「進学も出来る学校」を目指すという目標を掲げたのもその一環だ。そのため、普通科では12年度からセンター試験にも対応できるカリキュラム編成とした。大幅な改編に対して教師から反対意見が出なかったのも、客観的なデータで生徒の状況を把握し、指導の手応えを感じているからだ。そして何よりも、教師が学校を変えていく喜びややりがいを実感しているからに他ならない。

「管理職はビジョンを示し道筋を付けただけ。一人ひとりの教師が、本校の置かれた環境や役割・使命を自覚し、それに基づいてなすべきことを考え、実行したからこそ学校の改革は進みました。大切なのは1人のスーパーティーチャーが100をこなすのではなく、教師100人が1つずつ出来ることを実行すること。一人ひとりの頑張り相乗効果を生みだし、学校を大きく変えていくのです」(倉光校長)

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。

2009年9月号指導変革の軌跡「千葉県立姉崎高校」など

▶▶▶ <http://benesse.jp/berd/> → HOME > 情報誌ライブラリ(高校向け)